

日本とアメリカ
愛をめぐる
逆さの常識

アントラム 栢木利美

Antram Kayaki Toshimi

中公文庫



中公文庫

にほん と アメリカ あい を めぐる さか じょうしき
日本とアメリカ 愛をめぐる逆さの常識

定価はカバーに表示してあります。

1998年10月3日印刷

1998年10月18日発行

著者 アントラム ^{かや き とし み} 栢木利美

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Antram Kayaki Toshimi

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203261-X C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

日本とアメリカ 愛をめぐる逆さの常識

アントラム 栢木利美



中央公論社

目次

1 私の国際結婚

父の死と夫の赤いセーター 11

アメリカと戦った父の遺言 18

祖母の糠味噌とアメリカ人のおムコさん 23

わが家の日米摩擦 30

「おばあちゃん、ありがとう」 37

2 国際結婚はむずかしい

“YES人形”の失敗 41

日本人夫がとまどう *may be* 妻 49

アメリカ人が錯覚している日本女性!? 54

3 仕事人間とキャリアウーマン

仕事と家庭、二者択一を迫られる夫 65

アメリカ版 “女はつらいよ” 74

4 変貌するファミリー像

シングル・ファーザーの子育て 83

シングル・マザーとベッド 95

同性愛者のベビー・ブーム 101

愛よりも “精子” を選ぶ女たち

108

アメリカの養子たち

117

命名は愛の贈り物

126

5 夫婦が交わす “契約書”

“夫婦はパートナー” の時代

133

四十歳——私の中の愛

141

6 さまざまな愛の形

七十代義母のボーイフレンド

151

再婚同士の老いの幸せ

161

素敵な関係

167

“夫婦別姓” アメリカ事情

172

7 直面する「心」の崩壊

夫の“セクシー不足”をめぐる裁判

177

離婚率六〇%の中の子供たち

184

孤独なアメリカ人の“心の杖”

193

「I LOVE YOU」のほんとうの意味

10

8 日米 愛の混戦模様

粹な日本 “不倫” カップル

208

新婚旅行に見る日米の落差

214

喫煙と隣人愛

222

日米 不倫とSEX

230

あとがき 日米 “常識の落差” を再確認しながら

241

文庫版あとがき

250

日本とアメリカ
愛をめぐる逆さの常識

1 私の国際結婚

国際結婚と一口にいつてもむずかしい。私の場合、日本で、暮らしの中の日米摩擦からそれは始まった。

父の死と夫の赤いセーター

夢を見た。私は、まだ小学生。いつもの朝の光景だった。母は父の靴を磨いていた。やがてピカピカになった靴をきちんと揃えて置いていた。次に、テーブルの上にハンカチとチリ紙を置いた。それらを、父はズボンのポケットに入れ、ピカピカの靴を履き、母が手渡したカバンを持ちながら言った。

「じゃ、行ってくるよ」

母は、「行つてらっしゃい」と頭を下げている。

（お母さんは、えらいな。毎朝、早く起きて、お父さんの世話をあんなに一生懸命している……）

と、感心している自分がいた。

「利美、ちゃんと妻の役目を果たしているかい？」。それは祖母の声だった。

「おばあちゃん、もう五年以上もサムの靴は磨いていないわ。それに、ここ四、五年、朝食を作ったこともないの」

「サムは、いい人なんだよ。大切にしないと、お前、バチがあたるよ」

と祖母は私を叱っていた。その声は、大きくハッキリとして、隣にいるようだった。ハッとして目が覚めた。

考えてみると、その日は父の命日だった。

雪が今にも降ってきそうな、一月の寒い日だった。それなのに、父の病室は暖かく、ブラウス一枚でも平気だった。夜、七時を過ぎ、私は夕食をすませて、小説を読んでいた。

その前日、父の担当医に、母と姉と私は呼ばれた。

父は心不全だった。そのとき医師は、肺のまわりにあった水も無くなり、経過は順調、とレントゲンを見せながら説明してくれたのだった。

「このぶんだと、二十四時間の看護も今日までで、明日からは昼間だけでいいでしょう」
今が峠、と言われ、母は昼間、姉と私が夕方から翌日の朝まで、交替で看病した。

だからその日は、もう夜の看護はいらないと言われたけれど、私は、もう一日だけと思

って泊まることにした。でも、心は軽かった。今までのように、いつ心臓の発作が起きるか、ビクビクしながら、朝まで寝ずに父の顔を見ていることはないのだ。

今日は、これまでのように小説を持ってきても読まなかったのと違って、安心して読めるのだと思うと、うれしかった。

いつものように、父は、目をつぶったままだった。ここ一週間、ほとんど口をきかない。何を言っても、「うん」と言うぐらいだった。

その日、父は、昔の夢を見ていたのだろう。

「資生堂のアイスクリーム……千疋屋のメロン……」

などと寝ごとを言っている。

「熱があるのかしら、食べ物の話なんかしたことのないお父さんが言うんだから、よっぽど食べたいのかも。それにしても、銀座の資生堂のアイスクリームなんて、いつ頃の夢、見ているのかしら。朝になったら聞いてみよう」

そう思いながら、小説を読みはじめた。

三十分ぐらいすると、小さく「ううっ」と唸る声^{うな}がした。のぞいてみると、とても苦しそうな顔をしている。またもや、「ううっ」と言い、目を開けた。その目は、半分以上、白目になっている。

私の体はガタガタ震えだし、やっとの思いで緊急のボタンを押した。すぐに、看護婦がとんできた。彼女は、備え付けのインターホンで医者の緊急呼び出しをした。

彼女は、夜食に餃子を食べていたのだろう。まだ口をもぐもぐさせている。口からは、にんにくの匂いがプーンとした。

（こんな一大事に、なんで餃子なんか食べているのよ。もっとテキパキやってよ）

と私は、心の中でイライラしていた。

医者が来ると、彼女に心電図のモニター機と酸素マスクの用意をするように言った。

何人かの看護婦がさまざまな器具を手にして入ってきた。さっきの看護婦が戻ってきた。

「先生、酸素マスクです」

「君、これは、子供用だよ。大人用を大至急持ってこい！」

医者が怒鳴った。

「もう、これで、父が死んだら、あなたのせいよ！」

私は、その看護婦の腕を掴み、大声で怒鳴った。

「お父さんは、心臓は動いていますが、呼吸は止まっています。家の人をすぐ呼びなさい」

医者は、取り乱している私の手をとって言った。

（この人は、何を言ってるの。お父さんはもう死んだと言っているの。ウソよ。死んでなんかいないわ）

私の頭の中は混乱し、今、目の前で起こっていることの整理がつかなかった。

「さあ、早く、電話してらっしゃい！」

またも医者が言った。

私は病室を出て、斜め前にある公衆電話に向かって走った。電話機が何キロも先にあるように遠く感じた。

ダイヤルを回した。母になんて言おうと思いつきながら、ゆっくり回した。つながらない。何度やってもつながらない。そこへ、父の病室へ行く別の医者が通りかかった。

「君、お金を入れなくては、かからないよ……」

そう言うと、私に百円玉をくれた。私は、お金も持たずに電話をかけにきていたのだ。受話器の向こうには、いつもと同じ声の母がいた。

「お母さん、あのね、あのね。お父さんが死んだんだって。死んじゃったの。どうしよう。どうしたらいい……」

「そう……死んだの……」

母は、小さな声でつぶやいた。